[研究ノート]

晩年のシチェドリン(5)

相馬守胤

8　最期　—1889—

V.A. オボレンスキー公爵による既述の回想[注1]で述べたように、シチェドリンの最期の日々はまことに深刻なドラマの連続であった。さらにもう一つの重要な証言として、看護婦タチヤーナ・アンドレーエヴナ・メチソヴァの手紙を欠かすことはできない。彼女は病人の看護のため、医師ボトキンの強い要請によって招かれた者で、息子コンスタンチンの言葉によれば、気配りが非常に細やかで、病人の辛い気持ちをやわらげてくれたのである。彼女は革命後パリに亡命し、文学研究家 K. サーニナ[注2]と、ジャーナリスト B. シャルフェーエフに、サルトィコフ家滞在中のことや、看護の様子などを回想している。1950 年 K. サーニナに宛てた手紙によると、

「私は重病人のところへ行きました。彼にはしばしば譫言の発作がありました。そういうときに彼は譫言でしきりにツルゲーネフやネクラーソフと話をし

注1 『文化と言語』第 29 巻第 2 号、107-110 頁、1996。

注2 キラ・サーニナ。下記の 358 頁にのぼる浩瀚なモノグラフを出版した。
《SALTYKOV-CHTCHEDRINE. SA VIE ET SES OEUVRES》 PAR KYRA SANINE. Docteur es Lettres, PARIS. INSTITUT D'ETUDES SLAVES DE L'UNIVERSITE DE PARIS, 9, RUE MICHELET, VIe,1955.

ていました。〈…〉病状が少し軽くなると、医師達に禁じられているのに、さっそく仕事にとりかかりました。最後の3年間、彼の生活は単調に流れていました。彼は規則正しく朝の8時に起きました。毎日、朝と夕方にマッサージをしなければなりませんでした。ちょうど午後4時には、それより1分と早くもなく遅くもなく、彼は食卓につき、晩の9時に就寝しました。例の発作に悩まされていないときは、自由時間をすべて仕事に向け、どこへもでかけませんでしたが、ときには四輪箱馬車に乗り、窓を全部開けたまま、半時間ほどの散歩に出かけました。彼のほとんど唯一の訪問客としては、家族ぐるみの親しい友人で、文壇との関係が深いことで有名なペテルブルグ市会議長 V.I. リハチョフと、元老院法律顧問 A.M. ウーンカフスキーだけでした。この二人ともサルトィコフの遺言執行者でしたが、ある問題で二人の間に言い争いが生じ、そのためミハイル・エヴグラフォヴィチは大いに悲しみ、健康をひどく悪化させたので、その人達は各人ばらばらに彼を訪れていました。こうした事情があったので、ミハイル・エヴグラフォヴィチは自分の著作の出版者であるスタシュレヴィチに対して、第3の遺言執行者および自分の子供達の後見人を依頼しなければなりませんでした。彼はこの人達を迎えるとき、気兼ねなく室内着のままで気軽に迎えるのでした。お医者さん達も規則正しく彼のところにやってきました。つまり、ボトキンと彼の助手、特にヴァーシリエフ医師が頻繁にやってきました。死ぬ前の最後の数カ月、サルトィコフは局外者をほとんど誰も受け着けず、こうした来客のうち誰かが取り次がれると、彼は「忙しいと言いなさい…… 死にかかっているんだ……」と言うのでした」

「〈1889年〉4月26日水曜日、患者に脳卒中が生じました。彼は朝から神経が高ぶった状態で、自分の著作集出版の仕事で興奮し、いつものように何か書いていました。3時にはヴァシーリエフ医師が来ることになったいましたが、15分遅れました。このことが患者を興奮させ、心配させる新たな原因となりました。」

看護婦のタチヤーナ・アンドレーエヴナは、彼を落ちつかせようとなだめ、

そのときシチェドリンが椅子からくずれ落ちるのを見た。そこで彼の腰をつかんで支え始めたら、その時ヴァシーリエフ医師が部屋に入ってきた。看護婦の証言は次のように続く。

「サルトィコフを長椅子に寝かせましたが、彼は気分が悪くなりました……彼を正気にかえらせようとしました。しばらくたってそれは成功しましたが、彼は口がきけなくなりました。患者は手をかすかに動かして机を指し示しました[注3]。彼をそっちの方へ連れていき、彼にペンを手渡しましたが、彼はもう書く力がありませんでした。左手に移しましたが、そっちの手ももう動きませんでした。ミハイル・エヴグラフォヴィチは聖像の方へ連れていってくれるようにと合図で頼みました。彼を長椅子の方へ連れていくと、彼は顔にずっと恐怖の表情を浮かべて、部屋の右隅を示し続けました。その場に居合わせた人たちはそこに何も見ませんでした。この最後の身ぶりは理解できないままでした。患者を長椅子に寝かせると、彼は意識を失いました。木曜日は一日中意識がもどらず、4月28日金曜日に彼は亡くなりました。」

この、聖像の前へ連れていってくれと頼んだ事実に関しては前稿[注4]でも触れた。シチェドリンの宗教心を解明する数少ない鍵の一つである。遺言としては、非常に詳細に、自分の墓のことや葬式の細部にわたって指示をしていた。

墓はペテルブルグ郊外のヴォルコヴォ墓地の、出来たらツルゲーネフの墓のそばに(около Тургенева)埋葬してもらいたい。遺体は必ず解剖に付されたい。墓石の上には彼の書斎にあったベルンシタム作の胸像を載せるように、というものであった。この遺言はそのとおり実行されたが、S.マカーシンによると、

注3 死ぬ前の数カ月シチェドリンは、自分の書斎にベッドを移し、いつも書斎で過ごしていた。彼はそこで息を引き取った。彼の死後数日たったときに描かれたスケッチが、『マカーシンⅥ』c.288、289の数枚の図版の中にある。

注4 『文化と言語』第32巻第1号、219頁.

その後、「われわれの時代になって、シチェドリンの希望はすでに破られて、彼の墓は別の場所に移された」[注5] とある。筆者が 1974 年と 1992 年に訪れたときは、ツルゲーネフの墓と若干の距離をおいて、向かい合って建っていた。文献によってはоколо Тургенева ではなく、рядом とあるので、かつては並んであったものが、後に向かい合った「別の場所」に移されたと言うのであろうか。рядом も около もいずれも「近くに、そばに」という意味もあるので、この点に関してはいまだに釈然としない。

彼の遺体は故人の家で、ボトキン、ソコロフ[注6]、ヴァシーリエフの立ち会いのもとに、解剖に付された。S. マカーシン宛のキラ・サーニナの手紙の中の、看護婦 T.A. メチソヴァ談によると、

「解剖は大学病院の病理解剖医長が行いました。故人の遺体はその日の夜、防腐処理を施されました。脳回の深さでボトキンを驚かした、摘出された脳は、その後科学アカデミーに渡されました。故人のデスマスクと右手の石膏模型も同じ所に渡されました。デスマスクも石膏模型も彫刻家ラヴレツキーが作りました……」

1889 年 5 月 18 日付けでボトキンからベロゴローヴィーにあてた手紙を S. マカーシンが若干の医学的な細部を省略して転記した以下の内容によると、この解剖の経緯、病気全般についての意見、最後の日々の様子、妻エリザヴェータが夫の生活や創作活動に与えた影響などをうかがい知ることができる。

「Мих. Евгр.（ミハイル・エヴグラフォヴィチ）の最近の生活について、君はおそらく詳細にわたってすべて分かっていることでしょう。私の責任は医学的

注5 『マカーシンⅣ』 c.456.

注6 Нил Иванович Соколов(1844-1894)。内科医。S.P. ボトキンの助手。軍医大学教授。1876 年から毎週シチェドリンを訪れて、常に観察し、治療していた。

見地から見た出来事を君に伝えることだけです。イオアン神父が来訪したあと、呼吸困難が著しく激しくなって、〈…〉幾夜か眠れなかったし、足の浮腫が顕著になりました。厳格な牛乳療法が指示されました。〈…〉数日間は極めて著しい改善が見られ、肉体的疾患の症状は急激にひきましたが、心理的疾患は改善されないままでした。癇癪は最高度に達しました。イオアン神父のあとで彼の意識喪失までの間に、私が彼のところに行けたのはわずか一回だけで、死の前一昼夜の間の最後の回となり、彼がほとんど完全に意識のない状態にあったとき、誰も知らずにいて、言語麻痺と右半身の完全な麻痺状態で嚥下していました。彼は安楽椅子に座り、深く考え込んでいる人のような姿をしていて、長いこと揺すって目を覚まさせることによって、ある程度その眠りから覚ますことができましたが、彼は目を開き、陰気な目つきをしていました。身の回りでしていることが明らかに少しも分からず、またすぐに眠りに陥りました。このような状態から彼はその翌日も回復しませんでしたが、昏睡状態の呼吸する音だけが聞こえ、そのまま4月28日3時20分、我々の親友の命は絶えました。彼が最後の息を引き取るところへ、たまたま友人のリハチョフ、カーチャ[注7] N.Iv. ソコロフが集まってきました。娘はずっと、死に行く人のかたわらにいました。妻と息子は神経が弱いため、死と闘っている命の苦痛な姿を見るにたえられないので、すでに死んだあとにやって来ました。その日の深夜に解剖と死体の防腐処理を施しました。〈…〉解剖は1時まで続きました。私とセリョージャはやっと1時過ぎになって、ウスコフ、N.I. ソコロフ、ヴァシーリエフに解剖と防腐処理をさせるために残して帰宅しました。防腐処理は非常に首尾良く行われ、Елиз.Апол.（エリザヴェータ・アポロノヴナ）はすっかりあきらめて、解剖させました。もしも故人が自分の遺言の中で、必ず死体解剖を行うようにとの希望を表明しなかったら、彼女は決して解剖させなかったでしょう。〈…〉リュウ

[注7] S.P. ボトキンの妻エカテリーナ・アレクセーエヴナ。オボレンスキー公爵家の出。シチェドリンの才能を大いに尊敬していた。

マチの発作が再三あった影響で明らかに進行した複雑な心臓の苦痛を、彼の呼吸困難と咳が十分に説明しています。脳の病状は長らく続いたもので、肺炎のあとの4年前から特に激しく現れ〈1 нрзб.〉、その時にサルトィコフは左半身が衰弱し、言語機能の障害が見られ、完全な失神はさほど長く続きませんでしたが、数週間にわたって会話と執筆に明らかにその痕跡が認められました〈1 нрзб〉。精神状態はどうかというと、彼の訪問の際に観察しなければならなかった精神活動の悲しむべき痕跡と最近の作品とを心の中で結びつけるのは困難なような精神状態でした。ほとんどどうしようもないヒステリー状態と、自分の健康、自分の妻と息子に対する絶え間ない不平。ミハイル・エヴグラフォヴィチは自分がおかれた状態を甘受したり、その状態はどうしようもないものだという考えに慣れたりすることができなかったし、病人としての状態が著しく彼に負担をかけているということが望ましくなかったのです。彼はどうやら、もしも私がやりたいと思って、そのことにちゃんと着手したら、彼は疑いもなく回復すると確信していました。もちろん、そういった確信は彼の途方もない癇癪を軽減することはできなかったし、それはもちろん妻と息子に対して激しく現れました。しかし私は、M.E. の要求は通常、十分根拠のあるものだったし、コースチャがやり始めた生活態度と、それに対して Елиз.Апол. が同情を示したことに平気でいるのは難しかったし、Елиз.Апол. が交際し続けていたつきあいを同情的に見ることもできなかったと認めなければなりません。こうしたことはサルトィコフにとっていやなことだったに違いないし、彼はそのことを形式的にも、他のいかなる考慮もせずに遠慮なく表明していました。彼は妻も息子も、ときには娘をも口を極めてののしったし、自分の好みに全く合わないその友人をもののしりました。自分を家族から引き離してくれと、絶えず頼んでいましたが、そのことで友人たちから援助してもらえる望みを失うと、彼は市議会議長を通じて行動しようと欲しました。しかしもちろんそこでは我々にとって新たなことは何一つなく、この夫婦の30年にわたる同居生活の関係はあのようにできあがって、続きました。また、明らかに Мих.Ев. の脳はこうした絶えざる刺激を必要としていたし、彼はそれをいろいろな形で Елиз.Апол. か

ら受けていて、彼女を故人は理解していたし、見抜いていて、深く軽蔑していましたが、それと同時に、彼女と別れることはできませんでした。彼女は彼にとって必要な存在になっていたし、それなしでは彼は長く生きられなかったでもありましょう〈…〉。Елиз.Апол. を軽蔑し、ときには憎みながら、彼は彼女を確かに非常に深く愛していました。私個人にとって彼女はいつも好感をもてない人でしたが、Мих.Евгр. の創作活動に大きな意義を持っていたと思います。また、彼女は夫を捨てなかったし、彼への愛情なしに彼のそばで依然として持ちこたえ、何らかの極めて激しい場面のあとでも逃げなかったのは、彼女の手柄とすべきでしょう。Елиз.Апол. は燐のように M.Ев. の脳を刺激して、そのことによって彼の創作活動を少なからず可能にしたことは、私にとっては疑いもありません。リーザはどうなるでしょうか。とても美しいが、わがままです。コースチャは、その将来については大いに謎を呈する変わった少年に見えます。彼は悪い人間にも良い人間にもなり得るし、いまのところ彼は散漫で、軽薄で、あの子の興味関心には好感がもてません。話によると、ロシア語を上手に書くし、自分の友達に父 M.Евгр. の病気の悲しい日々をとても文学的に描写したそうです。決定的な卒中になる前に M.Ев. は明らかに気分がよかったが、沢山愚痴をこぼし、一定の指示をしないと、気分は確かに悪かったし、それと同時に、非常にいらだっていて、脳卒中までの数時間にわたって Елиз.Апол. と罵り合っていました。卒中の発作はヴァシーリエフの面前で起きて、言語能力の喪失、残っている意識と右手右足の動きが完全に麻痺した状態でした。1時間たつごとに意識は弱まっていきました〈…〉。翌日また足のむくみが現れました。心臓の働きはあまりよくなかったし、左手の脈は一時あらわれたが、その後はやっと感じられるほどで、ヴァシーリエフに塞栓症のことを考えさせ、私は依然として脳動脈硬化症における血栓症、組織の軟化と、遂には出血を推定しています。」[注8]

[注8] ГБЛ, ф. 22 (Белоголового). Из письма С.П.Боткина к Н.А.Белоголовому от 18 мая 1889г.

以上引用した手紙は、当時のロシアにおける最も優秀な医師の一人が書いたもので、多くのことを伝えている。

解剖の結果、シチェドリンの病気は、あれほど恐れていた精神錯乱寸前まで進行していたが、言語能力を喪失していたにもかかわらず、完全な失神を伴わず、知性がもうろうとしないまま「解放者である死」が訪れ、燃え尽きたのである。

さらに興味深いことは、彼の妻が彼の脳を燐のように刺激し、彼の文筆活動を可能にしたという文言である。長年にわたってシチェドリンの家庭生活をよく知っていて、彼の身体も、心理も分かっていた主治医であり最良の友の言葉であってみれば、信を置き得るものであろう。

また彼は自分の妻を軽蔑し、ときには憎みながらも、非常に深く愛していたという証言も興味深い。このことについては、A.I. スクレビツキーが、シチェドリンの家族が生活し、彼が最期を迎えた家の所有者である自分の妻に書いた手紙でも確認される。シチェドリンの葬式の3日後、1889年5月5日付けの手紙を引用してみる。

「親愛なるMarie!　なによりもまず自分の家に入ることに、今回のおまえは驚かないでしょう。僕はコートも脱がずに、サルトィコフ家に駆けつけた。僕はそこに期待したものを見いだしました。つまりE〈リザヴェータ〉・A〈ポロノヴナ〉はあまりにも神経ががたがたになっていて、僕を安心させようとつとめながらも、自分の悲しみによってよりも、僕の取り乱した姿によって、よりびっくりしたようでした。しかし彼女の心の中には後悔の念が現れました。はじめのうち彼女は、僕の言うことをよく聴かなかったことで、そのとき彼女は再三自分を責めたと言っていました。いまは、自分の気紛れによる軽率な振る舞いが、今は亡きミハイル・エヴグラフォヴィチを絶えず苛立たせ、そのことによって彼の状態を悪化させたことで良心が彼女を責めています。彼は一方の手で（もう一方の手は麻痺していた）彼女を抱擁しながら、やさしく彼女に別れを告げ、彼女の両手にキスをしました。脳血管の閉塞は水曜日に突然起きて、

一週間後はもはやこの世にいませんでした（4月28日）。病気の期間中を通じて彼は話す可能性が失われていました（しかし彼にむかって言っていることは理解していました）。生きた言葉こそが全生涯にわたって、虚偽、不正、暴力、社会や個人の欠陥と闘う最も強力な武器であったその人間にとって、恐ろしい状態です。

警察の報告によれば、3日間のあいだに（彼女はこのことに興味を示している）1万人以上の人たちがやって来たという話です…… 家の前には何百人もの人がいつも群がっていて、階段は故人の柩に向かう人たちであふれ、そこをかきわけて進むことになるやもしれぬと期待していました。あなたは、この家にはM.E.サルトィコフが何年から住んでいた、そして1889年4月28日に亡くなった、と書いた大理石の銘板を埋め込むべきだと思います。こうしてあなたの所有物であるこの家の壁に歴史的な銘板を掲げる光栄に浴する権利を、自分以外の誰にも与えたくありません。故人は僕のことをなつかしがっていて、この冬は悩みを打ち明ける相手もいないし、話し相手もいないと、しばしば繰り返していたことを、周囲の人たちの話で知りました。彼は僕に会いに来てドアをノックしたほどです。

いま彼の作品の全集が印刷されています[註9]。いまのところ第1巻が出版されています。E.A.［シチェドリンの妻、エカテリーナ・アポロノヴナか？］の話だと、彼の作品の何部かは彼の友人たちのために厚手の光沢のある上等紙に印刷されていて、1部は僕の分に予定されているということです。今日は息子のコンスタンチンが、それぞれの巻が出版され次第、そのような製本をしたものを1部受け取る権利の切符を僕にくれました。

故人がいつも使っていた物で、あまり大切でない物があったら欲しいと奥さんに言ったら、彼女は農民のローズヴァリニ[註10]の形をした、紙巻きタバコ用の灰皿を届けてくれました。この死は、住居を替えることについてもE.A.の束縛

註9 これは作者自身が準備した9巻物の最初のシチェドリン全集（1889-1890）を指す。
註10 幅が広くて低い百姓橇。

を解いてくれたわけです。彼女は、つらい思い出が尾を引いているらしくて、あんたの家に残ることはできないと言いました……[注11,注12]」

以上引用した手紙は、ソ連邦科学アカデミー・ロシア文学研究所の手書き資料部門にある、A.I.,M.S. スクレビツキー夫妻に関する資料の中にあったもので、シチェドリンについてのこの夫妻の個人的な手紙は、このほかに数通保存されている。その点で次ぎに引用するミハイル・エリゾンの発表はシチェドリンとこの夫妻の関係のもう一面を物語っている。

リテイヌィー大通り 62 番館
M.E. サルトィコフ＝シチェドリンの最晩年と死についての新たな数ページ

リテイヌィー大通り 62 番館。門の右側、窓と窓との間の壁面に記録板が埋め込んである。《この家で 1876 年からミハイル・エヴグラフォヴィチ・サルトィコフ＝シチェドリンが住み、1889 年に死んだ》。『現代の牧歌』『ゴロヴリョフ家の人々』『国外にて』『伯母への手紙』『僻地の旧習』や、その他多くの童話がここで書かれた。ここには「祖国雑記」の編集者たちがやってきた…… 1886 年 11 月 8 日［作家の名の日に当たる］には友人の学生たちと共にアンナ・イリイチニナとアレクサンドル・イリイチ・ウリヤノフがやって来た。この銘板はそのことを想起させ、いつかは博物館の展示物が語るであろう……

革命まではリテイヌィー大通りの 62 番館はマリーヤ・セミョーノヴナ・スクレビツカヤ（1843－1900）が、自分の祖母 G.S. ニロトモルツェヴァから相続したものだった。M.S. スクレビツカヤは、S.A. ユーリエヴィチ侍従武官長の娘

注11 E.A. サルトィコヴァはその後ネフスキー大通り 45 番館に転居した。

注12 Эльзон М.«На Литейном, 62.» Несколько новых страниц о последних годах и смерти М.Е.Салтыкова－Щедрина. ——В кн. “Белые ночи”. Очерки, зарисовки, документы, воспоминания. Л., 1975, с. 368-375.

で、著名な社会活動家として有名だった。そのほか、1885年から1900年まで、彼女はペテルブルグのいくつかの学校の、最も貧乏で有能な生徒たちを物質的に援助した。

M.S.スクレビツカヤの再婚（1882年）の相手はアレクサンドル・イリイチ・スクレビツキー（1827－1915）である。有名な歴史家、眼科医で、失明者達のために大いに尽力した。A.I.スクレビツキーはペテルブルグ大学の医学部を1849年に卒業し、デルプト大学（現在タルトゥ大学）の医学部を1859年に卒業した。彼の最も有名な業績の一つは4巻物の《アレクサンドル2世治下における農民事情》（1862－1868）で、1861年2月19日の布告（農奴解放令）の条項に対する詳細な歴史的解説となっている。このユニークな著作からK.マルクスが抜き書きしたものが保存されている。

A.I.スクレビツキーは、ペテルブルグでは医者として、また、進歩的な人物として知られていた。N.G.チェルヌィシェフスキーの従兄弟のA.N.プィピンは彼に、流刑中の作家のために眼鏡を作ってくれと頼んでいる。

一言で言って、A.I.とM.S.の、このスクレビツキー夫妻は、「古典的な」家作持ちではなかった。わが国では一般に、家主とはごく限られた、欲張りな人々、あるいは官僚の出世街道をあまりにも高い地位まで登り詰めて、下の人たちを踏みつけにしている人々のように見る一定の観念がある。

M.E.サルトィコフ＝シチェドリンと彼の〝家主たち〟との関係が金銭的な関係の限界を超えていたことはよく分かる。気難しい性格は、検閲と、長引いて晩年に重くなった、さらにうまくいかなかった家庭生活と長年にわたって闘い続けたために、よりひどくなっていたシチェドリンは、スクレビツキー夫妻に深く心を引かれていて、彼らと交際することによって自分に不足していたもの、つまり心の暖かさと理解を受けとっていた。非合法の詩や散文の見本を収集していたA.I.スクレビツキーにシチェドリンが、1906年までロシアで発表されなかった童話『学芸保護者の鷲』の手書きの異本の一つを贈ったのは偶然ではない。」[注13]

シチェドリンの死につては、翌4月29日の新聞でわずか数行にわたって報じ

られたが、これは本人が生前の遺言で望んでいた通りであった。彼が書き残したメモは次のような極めてそっけないものである。

「広告案（「ノーヴォエ・ヴレーミャ」、「ノーヴォスチ」、「ロシア報知」に、モスクワには電信で伝える）：某月某日に作家 M.E. サルトィコフ（シチェドリン）は死去した。どこそこでいついつか埋葬」[注14]

1889 年 4 月に書かれたこのメモには息子あての手紙が添えてあった。生前の彼の厳しくて陰気な外見、粗暴とさえ言える言行の裏には、妻への愛情、家族への心配り、文学に身を捧げる忠誠心などにあふれていたことがうかがわれる。

「愛するコースチャよ、私は日に日に死に瀕しているので、お前への遺訓はこうだ。母を愛し、大事にしなさい。そのことを妹にもよく言って聞かせなさい。もしもお前たちが母を大事にしなかったら、家族全部がくずれてしまう。なぜならお前たちは成人するまでまだまだ遠いからだ。よく勉強するようにつとめ、生活においては絶対に誠実でありなさい。これですべてだ。お前を愛している父より。

なお、何よりもまず祖国の文学を愛しなさい。そして文学者の肩書きを他の何よりも尊重しなさい」（XX、477）

シチェドリンの病気や、病いがいよいよ篤いことは噂や口コミで知られていただけではなく、首都の新聞も地方のマスコミもしばしば報じていたが、ついに死んだとなると、驚いた人も少なくなかった。ロシア文学と社会思想のすぐれた知性の一人が失われた意義が広範な層によって理解されていたことは、ペ

注13 Там же, с. 368-375.

注14 «Лит. Наследство» т. 13-14, с. 203. 自筆の原稿の写真版あり。

テルブルグでの葬儀に多くの公開演説が行われたことにも表れている。

5月2日午前10時に遺体をリテイナヤ街に出棺すると決定したことは、首都のすべての新聞が広告した。しかしその前夜、ペテルブルグ特別市警務長官（градоначальник）グレッセル中将の秘密指令により、葬列は10時ではなく、9時に出すように指示された。この指令によって葬列に加わる人数が最小限に少なくなることを考慮したのである。出棺の前日には警察署長が故人の家にやって来て、葬式の花輪に付いた献辞を「検閲」し、約150あった花輪のうち二つ、つまり、「感謝しているユダヤ人たちより」という献辞と、不明の人たちからの「反啓蒙主義との偉大な闘士へ」という献辞の付いた花輪が撤去された。

5月2日の朝は、ペテルブルグの空はどんよりと曇って、肌寒く、小雨も降っていた。こうした悪天候にもかかわらず、7時前には早くもリテイナヤ街の家の前には若い学生たちをはじめ、多くの人々が集まり始めた。部外者は部屋に入れなかった。集まった人々の中には、当時ロシアに住んでいた英国の女流作家E.-L. ヴォイニチ[注15]もいた。

まもなく警察の係官の一隊と騎馬の憲兵若干名が現れた。追悼祈祷は長びいて、終わったのは9時半頃だった。柩は金襴に覆われた2台の霊柩車の中の1台に載せられた。1台目の霊柩車に積みきれなかった花輪は2台目に積み込まれた。学生たちや若者達は自分たちの肩に柩を載せて運ぶことを望んだが、警察は許可しなかった。霊柩車は、ペテルブルグの「顕官」グレッセルの秘密指令に従って、ネフスキー大通りに出ると、馬をトロットの速歩で走らせた。葬式に参加した人々が走らなければついていけないようにしたのである。騎馬の

注15 エテル・リリアン・ヴォイニチ（1864-1960）。英国の数学者ジョン・ブルの娘。1885年ベルリンの音楽学校を卒業。S.M. ステプニャク＝クラフチンスキーとの友情は生涯を通じて彼女の人生と創作活動に影響を与えた。1887-1889年ロシアに住んだ。英国に帰ってから革命的亡命ロシア人に協力した。エンゲルス、プレハーノフとも知己。1892年にシベリヤから脱走したポーランドの革命家M. ヴォイニチと結婚。1920年からニューヨークに住み、そこで生涯を終えた。シェフチェンコの詩やガルシンの作品などの英訳、ステプニャクの論文（1894年）（ゴーゴリ、A.N. オストロフスキー、ドストエフスキー、シチェドリンその他）の英訳等多数。

憲兵をも含む警官隊の抵抗にもかかわらず、学生たちはニコラエフスカヤ通りの始まりの所でやっと霊柩車を追い越して、多数の人の群で馬車の歩度を並足に変えさせることが出来た。葬列はその時から整然と整い、学生たちは2グループのコーラスで《Святый боже...》と《Вечная память》を墓地に着くまで代わる代わる歌った。葬列のコースはグレッセルの指令で、ニコラエフスカヤ通り、ラズエズジャヤ、リトフスキー運河といった、当時は人通りの少ない場所を通ってヴォルコヴォ墓地に至るものだった。これは近道だったのではなく、また、このコースより遠くしないでも、もっと賑やかな通りをたどることもできたはずである。かつてネクラーソフの葬式が大規模な政治デモに発展した失敗を繰り返すことを警察が恐れて、一連の指令を出したことは誰にも分かることであった。[注16]

しかし時代は変わっていて、警察が恐れていたことは起きなかった。ネクラーソフの葬式の時は、新たな民主勢力が高揚し始めていた頃で、2回目の革命的状況が熱しかけていた時期だった。それに比べて、この度のシチェドリンの葬式は、熱気をはらんだ社会的機運が沈滞して、無気力な状態がまだ続いており、新たな勢力の高揚が若干ほの見えてはいたものの、依然として警察の優勢が続いていた時期であった。墓地では、まだ土で埋めてない墓穴のわきで、教会葬が行われ、しきたりに従って何人かのスピーチがあった。はじめに、ある農民から届けられた詩が朗読され、K.K. アルセーニエフ[注17]が二人目のスピーチをし、次いで学生のイヴァノフとザハリインが詩を朗読、次ぎにO.F. ミーレル、D.P. シリチェフスキー[注18]その他がスピーチをした。その中の一人はシチェド

注16 こうした葬儀の模様の記述は、S. マカーシンが、パリで発行されていたロシア語雑誌《Социалист》("Le Socialiste") の1889年No. 1, p. 28-30に掲載されたペテルブルグ特派員の記事からとったもの。(『マカーシンⅣ』c.461-462).

注17 Константин Константинович Арсеньев (1837-1919). リベラル派社会評論家。

注18 Дмитрий Петрович Сильчевский (1851-1919). 伝記作家、職業革命家。逮捕歴、流刑歴多く、シチェドリンが内相ローリス・メリコフに頼んで、釈放してもらったこともある(1881年)。

リンの童話『良心の失踪』の抜粋を朗読した。ネクラーソフの葬式のときにドストエフスキーやプレハーノフがスピーチしたような、亡くなった作家にふさわしいレベルの人物のスピーチはなかったし、あるはずもなかった。

葬儀に参列したP.M.スヴォボージン（1850－1892）が、その当日チェーホフにあてた手紙では、埋葬の様子がつぎのように語られている。

「今日（5月2日）私達はサルトィコフを埋葬しました。柩は若者達の手で住居から墓地まで運ばれ、霊柩車は生花や花輪で埋め尽くされました。花輪は全部で140個あり、銀色の物がたくさんありました。会葬者は全体としてとても多かったのですが、ネクラーソフやツルゲーネフやドストエフスキーの葬式よりは少なかったです。サルトィコフはツルゲーネフやカヴェーリンの墓の向こうに葬られました〈……〉会葬者達は墓の周りや、周りの墓の上だけではなく、すぐ脇に墓穴を掘った教会の軒や窓のくぼみや、窓にまでへばりつき、樹の枝にもぶらさがっていました。聖体儀礼を行っている間、私とスヴォーリンは墓地の中を散歩して、どこかの墓の石に腰を下ろし、哲学的思索をし、あなたのことを思い出していました。柩を墓穴に下ろし始めたとき、密集した群衆をかきわけて通ることが出来なかったので、墓前で話していたスピーチは一つも聞き取れませんでした。そもそもの朝から終わるまで雨が降っていたので、群衆はみな傘をさしていました。2時半に私達は墓地を離れ、朝の10時にそこへ行きました。若者達はスピーチのとき、すこし興奮して、〝ブラーヴォ〟の声や拍手まで起こって、スピーチは途切れがちでした」[注19]

シチェドリンの死と葬式は世間の注目を浴びたことも確かである。こうして少なからぬ関心を集めた事情としては、ちょうどこの1889年の4月に彼自身が

[注19] Чехов А.П.Полн. собр. соч. и писем в 30-ти томах. Письма в 12-ти томах, М., 1976, т. 3, с. 426.

準備しておいた9巻物の作品集の第1巻が出版され、当時としては珍しく、たちまち売り切れになったという事情が影響したことも考えられる。

こうした彼の死を悼む弔意の反響、新聞記事、書簡、回想記、詩、評論等々は膨大な量にのぼるもので、この数日間の記事を全部集めたら、ゆうに一冊の本を超えるほどだった[注20]。D.A. トルストイ、M.N. カトコフ、K.P. ポベドノスツェフといった錚々たる偉才たちが権力の頂点にあった時代としては、多くのマスコミがあれほど大量の記事を長期にわたって掲載した事実に驚くほどである。具体的なリストは『文学遺産』に詳しい[注21]。彼の死に関する「追悼」文献には、生前の彼にたいする批判が激しかったと同様、激しい賛否両論が集中し、ほとんどすべての定期刊行物や機関誌に掲載された。公式筋だけは沈黙していたが、ペテルブルグ市議会だけは、シチェドリンと親しかったV.I. リハチョフが議長をしていたこともあって、唯一の例外だった。議会は哀悼の意を表し、シチェドリンを決して忘れることはないであろう、偉大な作家がペテルブルグに住んでいたことを誇りとすると表明した[注22]。

彼に関するこれらの発言は、思想を同じくする陣営の人々のものだけではなく、論敵のものも本質的に興味あるものである。なかんずく「モスクワ報知」に載った5月4日の匿名の筆者[注23]による次のような論敵の発言は、政治的に最も明確なものであろう。

注20 モスクワのN.P. ラーニンが発行していた《Русский курьер》の記事。«Лит. наследство» т. 13-14, с. 202.

注21 Там же, с. 247-274. Эфрос Нат. Отклики на смерть Салтыкова.

注22 Там же, с. 202.

注23 フランスにおけるシチェドリン研究者キラ・サニナ（リオン）がS. マカーシンに伝えてきたところによると、彼女はパリかジュネーブの図書館で、1889年5月4日の「モスクワ報知」の余白に、『シチェドリンに関する発言への反論、L. チホミロフの記事』と書き付けてあるのを見たということである。かつての革命家、「人民の意志」党員、後の変節者L.チホミロフはちょうど1889年に亡命先からロシアに帰国した。まだ外国にいたころ彼は「モスクワ報知」の匿名の寄稿者だったし、後に、1909年からはその編集者となった。彼はシチェドリンを知っていたし、自分が書いたもののうち若干はシチェドリンの手法を模倣している。

「70年代末と80年代始めの苛酷で不安な時代に、シチェドリンの《風刺》は、我々テロリストの非合法文書や、国外の宣伝小冊子、ダイナマイトの爆弾と同様、我々の手中に握られた破壊的武器そのものであった。M.E. サルトィコフはそのことを知っていて、政府が革命的テロルと闘うために講じなければならなかった方策を愚弄することをやめなかった。当時のテロリストは合法的活動家と非合法の活動家に分かれていた。シチェドリンは疑いもなく、ロシアに対して、前者よりもはるかに多くの精神的打撃を加えた後者の範疇の最も輝かしい、才能豊かな代表者だった。」

「我々の周囲はすべてがいまわしく、腐っていて、愚かしいという偽りの確信を最も多く育むのは、シチェドリンの作品からではないのか。残念ながら我が国の青年の著しい部分が読みふけっていたし、いまも読みふけっているのはシチェドリンの作品ではないか。つまり、革命的理論の餌食となった不幸な青年たちに対する重大な責任は、シチェドリンにかかっているのではないか」

政治闘争の手段としてのテロを否定していたシチェドリンをテロリストと呼ぶことは勿論できない。しかし当時のロシアにおける文学面での最も偉大な敵とみなした点において、専制政治擁護陣営の主要な機関誌は正しかった。反政府的集団の代表者たちは、この作家の政治的位置と意義について評価していたし、それは種々の発言に反映していた。「人民の意志」党の長老 P.L. ラヴロフはパリにいる亡命中の革命家の集まりで、シチェドリンとチェルヌィシェフスキーの死に対する反響について演説した。また、60年代人の民主主義者 N.V. シェルグノフと、革命的ナロードニキの S.M. ステプニャク＝クラフチンスキーの意見を引用してみよう。

『ロシア社会のオーチェルク』の中で N.V. シェルグノフは次のように書いている。

「我々の社会的な諸問題を解決する重点は個人的な改悛にあるのでもなく、サルトィコフの墓前で演説者が要請したように自分の良心に問いかけることにあ

るのでもなくて、自分の思想に問いかけることにある。それ（良心）はそのように機能しているだろうか、また、それにとって理解しなければならないことを、それは理解しているだろうか。サルトィコフが呼びかけたのはそのような良心に対してなのである。

サルトィコフは社会的意識の良心に向かって呼びかけた。人間が社会的意識の減退に向かっている原因となっている共通の思想的原因を彼は究明していた。彼が語っていたのは、知的に自立した、理解する人々を創り出すような自覚的な発展のことや、その発展を阻害する一般的な原因のことである。思想と感性の限界を、誰一人としてサルトィコフのように追求しなかったし、さまざまな色、形、状態のグルーポフ市民のようには、誰一人としてそのように彼をいらだたせなかった。

サルトィコフは、個人的関係や社会的関係のあらゆる微妙な脈絡や動因をはっきり分かっている真の賢者であった。彼はそうした関係についてだけ語った。それらについてだけ彼は注意をうながした。それらの法則だけを彼は個々人の各々の心の中に探した。サルトィコフの知力は稀にみる洞察力、突如、瞬時にして直ちに人間の心の核心そのもの、あるいは多くのそのような心によって創り出された複雑な現象の核心を見抜く能力にあった。

だからこそサルトィコフを失ったことはあまりにも大きなことなので、サルトィコフがあれほど社会的意識の発展に力を発揮したほどに発揮できるような彼ほど偉大な人間は他にいない。彼を失ったことがこんなに大きいことなのは、サルトィコフが働きかけたまさにその良心に働きかけることができる作家は彼をおいて他にいないからである。

この真の巨人・サルトィコフと比較すれば、我が国の他の教師＝伝道者は全く幼児である。サルトィコフをこの世から送ったいま、考えるロシアは（意識的にせよ、無意識的にせよ）いまや中心体がもはやない。国民の最も知的に独立した部分全体にとってサルトィコフが灯台であったような、そのようなすべてを照らす灯台はもはやないと感じていた」[注24]

次ぎに引用するステプニャク＝クラフチンスキーの発言は、ロンドンに亡命していたとき、英国の読者向けに英文で書かれたもので、乱雑な紙片の中に保存されていた。それはどこの出版社に送ることになっていたのか、また、既に活字になって発表されたものなのかも確定できなかった。次のような文面である。

「サルトィコフはかつてロシアが生んだ最も偉大な作家の一人である。彼の死は、彼が40年以上にわたり、己がペンをもって忠実に奉仕した祖国から彼を奪い去った。しかし彼は生前すでに不死の人の列に連なっていた。

これは偉大な英国の作家を暗澹たらしめた、あの絶望的なペシミズムを知らない、永遠に若い心を持った、ロシアのスウィフトであった。

彼の才能が成熟期に達した45歳の時から、4年前に襲った死の直前まで、彼は、ロシアのような国において指導者であり得るかぎりにおいて、彼はロシアにおける急進的反政府活動の実質上の指導者であったし、同様に彼の才能に影響を及ぼすことのなかった年月は、彼の個性に消滅の刻印を押すことに無力であったようである。彼の最も新鮮で最も勇敢なすぐれた作品のあるものは、彼の晩年に創造されたものである。

己が仮借なき筆力でもってあれほどの恐怖を抱かせた苛酷な風刺作家は、生前、あの強力な個性がその活動と同様に興味深いものであり、その生涯は極めて高貴なるものの一つであった人間の評価を得ていた。〈……〉

サルトィコフがロシアに残したものは優れた文学遺産、彼が創造した世界全体、トルストイやツルゲーネフとは全く異なる視点から描き、しかし多様性において劣らず、人間の本性の洞察においても劣らず、才能においても劣らず、ロシア全体が描き出された巨大なキャンバスである。サルトィコフの作品はロシアにとって無尽蔵の宝庫である。しかし外国人にとってこれは封印された書

注24 Шелгунов Н.В.Очерки русской жизни. СПб., 1895, с.795-796.

物であり、依然としてそのままであろう〈……〉」[注25]

シチェドリンの死をめぐって、新聞・雑誌や個人的書簡に多くの反響があった。まず、G.I. ウスペンスキーは次ぎのように述べている。

「ミハイル・エヴグラフォヴィチの死は私に《本当の》作家のことを想起させ、《迷いから醒める》願望を呼び覚まし、文学上の些細なもめごとや、一時的な文学上の瑣事に興味を持つべきではないことを想起させた」[注26]

チェーホフは A.N. プレシチェーエフあての手紙の中でこう書いている。

「私はサルトィコフを惜しみます。これは不屈の、強固な人でした。小粒で、精神的にすっかり詐欺師になりさがった中くらいのロシアのインテリに巣くっているあの醜悪な精神は、最も頑固で執拗な自分の敵を失いました。暴露することならどんな新聞記者でもできますし、愚弄することならブレーニンでもできますが、公然と軽蔑することができたのはサルトィコフ一人だけです。読者の三分の二は彼を好きませんでしたが、すべての人が彼を信頼していました。彼の軽蔑の誠実さを誰一人として疑いませんでした」[注27]

好意的な反響の中には、シチェドリンの世界観からかなり遠いと思われる人々のものもあった。たとえば宗教哲学者、詩人、批評家の V.S. ソロヴィヨフは、M.M. スタシュレヴィチにあてて、「サルトィコフを心から悼み、故人の冥

[注25] このテキスト原文は M.I. Perper から伝えられ、ロシア語に翻訳されたもの。ЦГАЛИ, ф. 1158 (С.М.Степняка－Кравчинского), л. 78.

[注26] Успенский Г.И., т. XIV, с. 286-287.

[注27] Чехов А.П. Полн. собр. соч. и писем в 30-ти томах. Письма в 12-ти томах, М., 1976, т.3,с. 212-213.

福を祈る聖体礼儀を行いました。かくてこの人にとって代わる人はもはやいないでしょう」と述べている[注28]。

また、歴史家のYa.L.バルスコフは1889年のある手紙の中で、「サルトィコフと知り合った後には、多くの人々が新たに生まれ変わることが出来ると確信しています〈……〉。彼はそれほどに偉大で、強力で、不屈です……」[注29]

一方で、スヴォーリンの「ノーヴォエ・ヴレーミャ」の熱心な寄稿者V.V.ロザノフ[注30]は、露骨な敵意を包み隠さず、旅行中の汽車の中でシチェドリンの死について、「彼は《卑猥な》狼のように、ロシアの血を思う存分すすり、満腹して獲物を離れ、墓に入ったのだ」と述べている。

これが実存主義以前の独特な実存主義者、観念論哲学者であり、後期スラヴ主義の評論家でもある彼の発言として、極めて興味ある意見と言えよう。この人物が残した一連のメモには、このほか、「なんとも鼻持ちならぬシチェドリン」、あるいは、「僕はシチェドリンを読まないという、ある本能的な趣味を持っていて、これまで彼の《もの》は一つも読んだことがない〈……〉。これによって私は自分の心が大いに救われたと思っている」「このがなりたてる副知事[注31]は嫌悪すべき現象である。それに耐えるためには、我が国社会にあらゆる野暮ったさが生ずる必要があった〈……〉。彼は有名な作家になった。ローリス＝メリコフはすでに彼の友情を求めていて、彼にとっては知事なんかへいちゃらだった」などという走り書きの手記がある。

ところが後の日記で彼は突如〈悔い改めた〉告白をしている。

注28 Стаслевич в переписке, т. 5, с. 349. Из письма к М.М.Стаслевичу от 11 мая 1889 г.

注29 ГБЛ, ф. 16(Я.Л.Барскова), оп. 1, 4 об. Из письма к П.Ф.Преображенскому от 10 июня 1889 г.

注30 ヴァシーリー・ヴァシーリエヴィチ・ロザノフ（1856-1919）、評論家、哲学者。

注31 シチェドリンは1858年－1864年、リャザン県、トヴェーリ県の副知事を務めた。

「生まれてこのかた僕はある恐怖の中で君を否定してきたが、いまや君はその完全な真理の中で、僕の前に全貌を現した。シチェドリンよ、君を受け入れる。そして祝福する」[注32]

このような、呪いからハレルヤへの唐突な変容、複雑な矛盾については、浩瀚なシチェドリン伝記の著者S.マカーシンにして不可解ともらしている。この現象を、ロザノフが〈シチェドリンを読まないという本能的な趣味〉を克服して、遂に彼の作品を知り、彼の思想と芸術的な形象の底知れぬ深さを見たとするS.マカーシンの推察に無条件で賛意を表するためには、実存主義、観念論哲学、後期スラブ主義、そしてなによりもまずロザノフその人をもっと深く知らなければなるまい。

また、かつて日本のあるロシア文学者は次のように書いている。

「彼が大きな力強い才能にも拘わらず外国で迎へられること少ないのは、国境を越えて萬人の魂を開く暖い人間愛の不足に起因するのではないか、と筆者は密かに考へるものである」[注33]

トルストイも言った[注34]し、本稿の中で引用したステプニャク＝クラフチンスキーも述べているように、われわれ外国人にとって、シチェドリンの人物像にいまだ少なからぬ謎の部分が残っていると同様、あるいはそれ以上に、彼の作品の多くは依然として「国境を越えにくい」「封印された書物」であり続けるであろう。しかし、その理由は、前掲の「人間愛の不足」ではなくて、拙論[注35]で引用したS.V.コヴァレフスカヤの要約、すなわち　1．作品のジャンルが母国

注32 Турков А.М. “Ваш суровый друг”, М., 1988: с. 312.

注33『八杉先生還暦記念論文集　ロシア文化の研究』東京、岩波書店、1939、41頁、米川正夫「十九世紀露西亜のリアリズム文学」。

注34『文化と言語』第8巻第1号、81頁～82頁、1975。

注35 Ibid、82頁。

の土壌とあまりにも密接に結びついていること。2．ツァーリの検閲下で用いざるを得なかった「イソップの言葉」[注36]、と考える方が妥当かと思われる。

なお、この「人間愛の不足」と言う見解に対しては、その翌年のある文学全集の月報に次のような意見が掲載されている。

「なぜ、わが国ではこの古典作家サルトィコフ・シチェードリン（一八二六年—一八八九年）の小説がほとんど紹介されなかったのであろう？　といふ疑問は、われわれロシヤ語を多少でも解し露文学に興味を覚えてゐるものに共通したものであり、露文学専門の諸大家にあっても例外ではない。某大家は「シチェードリンが大きな才能にも拘わらず、外国で迎へられること少ないのは、國境を越へて萬人の魂を開く暖い人間愛の不足に起因するのではないか」と考へて居られる由（八杉先生還暦記念論文集）だが、他の先輩方ははたしてどういふ御見解なのであらう。わたしなど大作はもちろんのこと、ほとんどなにも読んでゐないので、意見などのべる資格などないわけだが、それでも失礼ながら、ほかに原因がありさうに思はれる。

人間愛の不足といふことがあげられてゐるが、かりにトルストイやドストイェフスキイのやうな人間愛だけを暖いものと解して、シチェードリンを顧みないことが正しいかどうかも考へてみなければなるまい。」「シチェードリンの作品は、〈…〉独自な表現形式や言葉で書かれた。反語的比喩的に、ときには人間社会を動物の世界におき換えて、かれはロシヤ社会の腐敗を批判し風刺したのであった。〈…〉なぜ、かれがこのやうな独特な言葉で書いたかは、当時のロシヤの社会事情を知ってゐるものには容易に推察できる筈だから説明しないが、そのためにかれの言葉がおのづと難解になり、後世、いはゆる《シチェードリンの言葉》とよばれるに至ったのである。シチェードリンはむつかしいといふのはこの意味であって決して内容がひとびとに理解しがたいといふ事では

[注36] «Лит.наследство», М., 1934,т. 13－14, с.675.

ない。むしろ、内容は萬人の魂に共感をよぶものだ。どうして、わたしはこんなことを書くかといふと、わが國のロシヤ文学の諸大家が形式や言葉の特殊性を強調するのあまり、未知の読者になんだかシチェードリンを近づき難いものに印象させてゐる傾向があるからだ。しかし事実、言葉のむつかしさは内容のむつかしさでもあったのである。いったいシチェードリンの批判精神の理解をぬきにして言葉だけをわからうといふのが無理ではあるまいか。シチェードリンはあるひとびとには到底わからない、といふのは矢張ほんたうなのであらう。そこで、翻訳にはまづ理解力のある適材を得なければならない。第二に、そのひとたちによって正確無比な仕事が遂行されなくてはならない。ときには訳文としては満足できなくても正確を期するためにごまかしをしないことが肝心だ。そして読者にお願ひするのは、こなれた訳文がかならずしも名訳ではない、と知って欲しいことだ。シチェードリンの翻訳はむつかしい、だからこんどの両氏もずゐぶん苦心して居られるだらうが、安心していいことには両氏がいはゆる諸大家ではなく、良心的なひとびとに属することだ。

わたしはいま、わが國の露文学紹介者のなかにわる達者な翻訳家がゐることを思浮べながら書いてゐたが、是非云はねばならぬことに気付いた。他でもない、ゴォゴリ以後の風刺文学の天才シチェードリンを、ゴォゴリのわが國における場合のやうな悲惨な運命に、決してさせてはならない！　といふことである。」[注37]

本稿の冒頭で述べたように、この研究ノートは、かつて筆者が書いた「小伝」の最晩年の内容を補足しようとしたものである。この試みは本稿をもって終わる。しかし、この作家が生きた空間も、作品を書いた生産現場も、現代のロシア人にとってももはや「異文化」的過去に属している。浩瀚な伝記4冊をもの

注37『新世界文学全集月報』第七号、昭和十五年十月、1頁－4頁、「『穏健な言葉』── シチェードリン紹介に関する希望 ── 双葉芳彦」。(仮名遣いは出来るだけ原文に近づけたが、旧漢字はほとんど新字体に直した)

した碩学 S. マカーシンにしても同様であり、ましてや国も民族も歴史も異なる日本で、しかも没後 110 年という時空のへだたりにあって、シチェドリンの伝記的実像に少しでも迫ろうとした試みは、非力な筆者の力の到底及ぶべきところではなかった。かつての拙著「小伝」の中の、当時のジャーナリズムを賑わした数々の論争の、せめてもの輪郭を、もう一度『マカーシンⅣ』に拠って検討しなおし、シチェドリンの 19 世紀ロシア文学における位置づけの一隅にかすかな照明を当てる作業を他日に期して、九牛の一毛にも満たぬこの「研究ノート」を締めくくることとする。

（1999 年 5 月 25 日稿）

主要参考文献

1. С.Макашин. Салтыков－Щедрин, Последние годы, 1875-1889. Биография. М., Худож. лит., 1989.
2. Собрание сочинений М.Е.Салтыкова－Щедрина в 20-ти томах, М., Худож. лит., 1965-1977.
3. М.Е.Салтыков－Щедрин в воспоминаниях современников, в 2-х томах, М., Худож. лит., 1975.
4. Белые ночи. Очерки, зарисовки, документы, воспоминания, Л., 1975.
5. Литературное наследство, т. 13-14.
6. Чехов А.П. Полное собрание сочинений и писем в 30-ти томах. Письма в 12-ти томах, М., 1976, т.3.